パワー

年末号

ぜんかいニュース

教育のつどいヒロシマ2023

全教広島は、11月18日(土)、広島市尾長小学校を会場に、2023 年度の教育のつどいを開催しました。寒気が入り、早朝まで冷たい雨の中、問題別、教科別、夕方からは記念講演にと終日熱心な学び合いが展開されました。参加者は、少なかったのですが、どの分科会も、充実の学びが行われ、参加者は久々に専門的な論議ができたことを喜んでいました。海田支部からは、OG・OB 合わせて8名が参加しました。問題別と教科別には91名。記念講演にはオンライン含め41名の参加でした。レポートは、折出隆彦さんが技術科で、また、胡谷　徹さんが「発達・学力・教育課程」でそれぞれ発表しました。記念講演の司会には、武本副委員長が行い、会場を沸かす名司会ぶりでした。

記念講演の参加者の感想をご紹介します。

昨年の夏の TANE！で平井先生の話を初めて拝聴しました。どこからそのパワーは生まれるのだろう…。「教育と愛国」の書籍版を拝読し、自分が生業としてきた教育は、政治の影響を非常に受けるものであり、政治に無関心では、教師としての信念を全うした仕事はできないと強く感じました。

「教育と愛国」を観ました。今日は「生」の平井先生にお会いしたいと思ってきました。「今起きていることから歴史を考えて」「子どもたちを人に出会わせたい」「子どもたちに語る」ほかにも、一言一言が心に突き刺さる思いでした。先生の強さはどこから？と思います。「知」の力でしょうか。私も自分のできることをと思います。

平井さんはとても柔らかい口調で大事なことをたくさん教えてもらった話だった。歴史は何のために学ぶのか、学ぶことで自分は何をするのかということを考えされられた。平和教育というのは人権について学ぶことだと思いました。

平和な社会をつくる主権者をつくることをやりがいに感じるような教師になりたいなと思います。

歴史教育、平和教育において「人に出会わせる」というお話が印象的でした。個人のこと、人生のことに思いをはせることで、差別はなくなると思います。平和教育を考えたとき、「自分にできるのか」「むずかしい」と思いがちですが、人に焦点をあてることが大切であると思いました。

支区で「つどい」を開催しました！

呉

２４日（金）の仕事が終わり、駆け付けた８名の仲間で久しぶりの会食となりました。職場の実態や日頃の実戦を語り合い、有意義な時間を過ごしました。

安芸

26 日にランチを食べながら交流しました。１０名が参加しました。楽しいイベントもあり、笑顔が絶えない時間となりました。

県教委と2回の交渉で2023年度確定交渉が終了！

11月30日、全教広島は最終の県教委交渉に臨みました。当局から提示された内容では、給与の改善がみられるものの、今日の物価上昇に見合うものではないと主張。それでも、暫定再任用職員（フル）の給与が、今年から導入された定年延長による再任者と同等の給与水準が実現しました。会計年度職員のボーナスに新たに勤勉手当分を来年度から支給することも実現しました。一方で、全国で唯一広島県が実施してきた「高齢層職員の昇給制」を廃止することや人事評価制度の分布率を国の準拠する等、これまで私たちの運動を反映して広島県が主体的に守ってきた制度を放棄する後退も見られました。また、産休者と代員の引継ぎが、1ヵ月に延ばされ、産休前1ヵ月は2人態勢が実現する全国初の制度となりました。

しかし、現場の教員不足や少人数学級の県独自の措置についても、教員の長時間過重労働の解消についても県としての明確な方針が示されることはありませんでした。国準拠の県教委の姿勢では、このままでは学校が持たない状況を変えることはできないと厳しく抗議するとともに、私たちは、引き続き県や国に対して、愚直に現場の声を上げていく必要性を改めて感じました。最後に、挨拶に立った小林委員長は、「かつて、外務省アジア局長という高官であったのに、職を辞して、初代の広島平和研究所長になった浅井基文さんに、『どうしてお辞めになったのか』と聞いたことがあったが、彼は、『官僚は、アメリカと財界のことしか頭にない。それに加担したくない』と答えられたエピソードを紹介され、目の前に座っている県教委の幹部職員に、「あなたたちは、どこを向いて仕事をしているのか、」とその姿勢を問われました。そこには、国ではなく、現場で奮闘する教職員に向いてほしいという願いが込められていました。

この委員長の挨拶は、きっと彼らの心に、今の教育行政でいいと思っているのかというメッセージとして残ったのではないかと思いました。尚、確定の詳細については、全教広島の速報をご覧ください。

文責　胡谷　徹